【編集委員】
片桐洋一（かたぎり・よういち）
1931年生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。大阪女子大学名誉教授。主要著書『伊勢物語の研究［研究篇］［資料篇］』（明治書院）『伊勢物語の新研究』（明治書院）『源氏物語以前』（笠間書院）

【編集委員】
山本登朗（やまもと・とくろう）
1949年生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。関西大学教授。主要著書『伊勢物語論　文体・主題・享受』（笠間書院）『日本漢詩人選集・菅原道真』（共著・研文出版）『平安文学研究ハンドブック』（共編・和泉書院）

藤島　綾（ふじしま・あや）
1968年生まれ。九州大学大学院博士課程単位取得。主要論文「三条西家流『伊勢物語』注釈の一形態－支子文庫本をめぐって－」（「語文研究」第83号）「『闕疑抄初冠』考」（「語文研究」第85号）

神田裕子（かんだ・ゆうこ）
1970年生まれ。早稲田大学大学院博士課程単位取得。早稲田大学大学院生。主要論文「河野美術館蔵『伊勢物語註　冷泉流』」（『王朝文学の本質と変容　散文編』和泉書院）「『玉水』の作品研究」（「演劇映像」第43号）「古活字本「謡抄」単辺十二行本の書誌学的研究」（「演劇研究センター紀要」III）

鈴木隆司（すずき・たかし）
1970年生まれ。京都大学大学院博士後期課程修了。高知大学助教授。主要論文「在中将集の性質と成立（上）（下）」（『国語国文』67-2,3）、「伊勢物語享受の一側面－新古今集・新勅撰集の伊勢物語歌－」（『国語国文』70-7）。

伊勢物語古注釈大成（いせものがたりこちゅうしゃくたいせい）　第二巻

2005年（平成17）5月30日　初版第1刷発行©

片桐洋一・山本登朗　責任編集

装幀　右澤康之
発行者　池田つや子
発行所　有限会社**笠間書院**
〒101-0064　東京都千代田区猿楽町2-2-5
☎03-3295-1331(代)　FAX03-3294-0996
振替00110-1-56002

NDC分類 913.32

ISBN4-305-70042-5 C3395
乱丁・落丁本はお取りかえいたします。
http://www.kasamashoin.co.jp

藤原印刷・渡辺製本
（本文用紙：中性紙使用）

つかし、きこえねはくるしとかきて、うはかきに、むさしあふみとかきて、おこせてのちに、をともせすなりにけれはといへり。うはかきにむさしあふみとかきける事は、なにといふ事ぞ。

風、これは、まことのむさしよりやりたる文にはあらす。津の国なかおかよりやりたるふみなれと、なかされたる身なれは、むさしの国よりやるといふにつきて、むさしよりの文と、おちゝ覧には人は見よと思て、かくかけり。そこにはふかくしのふといふ心に、むさしあふみとかけり。昔は、あふみは、ちあふみとて、みなかねをもちてしたりしを、世くたりてのち、むさしの国ちゝふの山といふ山里より、木をもちてあふみをつくりていてたりけり。人、わらひそしりなから、これもくるしからすとて、事なとのかくる時は、この木をもちてあふみをつくりて、おほくうりけり。さりけれと、むさしあふみといひて、いふかひなくいやしき物にそしける。されは、我身いやしき身にて、后なとくたてまつるふみなれは、いやしきふみといふ心に、むさしあふみとはかける也。

かみとは、その時のやまとの国司は、后の御せうと、堀川の大納言国経にておはしけれは、この人のつかひをつかはしてとりかくし給てける也。からめとらるゝといへはとて、まさしくなはなとつけたる事は侍らす。

鳥、

むさし野はけふはなやきそわか草のつまもこもれり我もこもれり

といへり。なにとよめるそ。

風、ことなる事なし。つまとは男をいへり。つねには女をこそ妻といふに、これは男を妻といふ。これも、いはれて侍り。なにも物のあひあふものをは、つまといふ。男のためには、女のあひあふたれは、妻と女をいふ。女のためには、男のあひあふたれは、男をつまといふへしとおほゆ。されは、ひこほしのつまむかへふねとこそいふを、又、たなはたの七夕のつまむかへふねともよめるは、この心なるへし。

十三

鳥、昔、むさしなる男、京なる女のもとに、きこゆれはは

十四

鳥、昔、男、みちの国まですゝろに行いたりけり、そこなる女、京のひとはめつらかにやおほえけんといへり。これはたれ人そ。

風、これは、さらに男も女もぬしなし。『万葉』の歌の中にあつまうとの歌とておかしき歌ともものあるを、とりあつめてこゝにかきて、あつまにけにきたりけりとしらせんかために、いまのことはをつくりてかきたれは、たれとぬしさたまらす。

鳥、

なか〳〵にこひにしなすはくはこにそなるへくかりけるたまのをはかり

風、なか〳〵に恋をしていのちのしなて物を思はんよりも、いのちみしかきくはことなりて、いつとなくあははやとなり。くはことは、かひこなり。かいこといふ物にてあるほとは、ひと所にさしつとひかさなりて、ほかへはいちりなともせて、かた時もはなれぬもの也。さて、ひるといふ物になりぬれは、又、あふことしけきもの也。さて、いとになりぬれは、）たまのおとなりてあふものなれは、いのちはみしかくとも、かいこにならはやとねかへり。たまのをはかりとは、すこしのほともといふ事也。この歌は、『万葉集』に、よみ人しらすとあり。人丸歌にや。

鳥、歌さへそひなひたりけり（ゐ）といへり。なにと申事そ。

風、ひなひたるとは、ゐ中ひたりといふ事也。ゐ中をはひなのいなしきといふなるへし。ゐ中はなに事も物なれすおさなひたるやうなれは、おさなきものをはひなといふか故に、ゐ中をひなといふ也。おさなきとりをひなとりなといふかことし。

鳥、

よもあけはきつにはめなでくたかけのまたきになきてせなをやりつる

といへり。この歌はなにとよめるそや。おほつかなし。

風、きつとは、きつね也。はめなでとは、くはせんとなり。くたとは、いる也。かけとは、にはとり也。宅鶏とかきて、くたかけといへり。家の庭とりなれは、きつねにくはせんといふなるへし。またきとは、またし也。

せなとは、男也。ちきる男とかけり。されは、夜明は、我家の庭鳥、きつねにくらはせん、またよもあけぬになきて、ちきる男をかへしたれはといふ也。又、ある物には、みちの国のならひとして、きふねをきつとなつけたり、人なとをかんたうするには、このきふねのおもきをふせて、それかしたにこめていましむるを、きつにはむるといふそといふ人も侍れとも、『万葉』に、きつねといふ字をきつとよませたり。そのうへ、にはとりをはきつねのこのみてくふ物なれは、これにくはせんといへるは、あひかなひて侍り。ふねかつけてにはとりかんたうせんとは、より所うとくおほえ侍り。

鳥、

くりはらのあねはのまつの人ならはみやこのつとにいさといはまし

といへり。なにとよみて侍そ。

風、くりはらとは、みちの国なる所の名也。あねはのそのくりはらのうらなり。そのさとに、いとこたちおもしろき松ありけり。あねはのひとつ松といひけり。この松をほめて、このまつの人にてたにあらは、みやこへゐていなましとよめるなり。

鳥、そこは、はや、さきこえ侍り。そも〳〵、つとゝいふ事にふしんあり。京よりもてくたる物をは京つとゝいひ、ゐ中よりもてのほる物をはゐ中つとゝ申とこそしりたるに、これは、みちの国なる物を京へもてゆかんとて宮こつとゝよめるにこそ、ことかわりておほえ侍れ。いかなる事にか。

風、されは、つとゝいふ事を、またしり給はさりけるにや。つとゝは、そのしるしなる物を申也。されは、京よりゐ中へもてきたる物は、京のしるしになるかゆへに、京つとゝいふ。たゝし、ゐ中へもてくへき物なれとも、また京にあるほとは、ゐ中つとゝいふ。これ、又ゐ中のしるしにてあるかゆへ也。又、ゐ中より京へもてきたる物をは、ゐ中つとゝいふ。また京へもてゆかて田舎にあるほとは、みやこつとにせんするといふ也。されは、歌にもよめり。

いしはしるたきなくもかなさくらはなてことにをりていゑつとにせん

といへり。これこそ、すは、京よりもてきたる物を京つとゝいひ、ゐ中よりもてきたる物をゐ中つとゝたにさたむへくは、山よりもてかへる花なれは山つとゝこそよむへけれとも、また家にもてゆかて山に有なから家へもてゆかんと思たれは、家つとゝいふ。家にいきつきては、山のものをは、花にても、もみちにても、もしは、まつ竹、まつほとにても、山つとゝいふへき也。されは、この松は、いまたゐなかにあるを京へもてゆかんと思へは、みやこつとゝよめり。京にもてきてうへてのちは、ゐ中つとゝいふへし。この歌は、『万葉集』に、

おくるさきみつのこしまの人ならはみやこのつとにいさといわましを

といふ歌にてあるを、上の句をひかへて、この物かたりにいれたる也。

十五

鳥、昔、男、みちの国にて、なんてう事なき人のめにかよひけるに、あやしう、さるへき女にもあらす見えけれはといへり。なにと申ことはそ。

風、この女は、つくり事也。歌は、そめ殿の后にたてまつりたりし歌を、ことはをかへ、かきいれて、ゐ中にてよめる歌にしたる也。なむてう事なきとは、あまりいやしけれは、名なとたれといひしともいふましき人の事也とかきなせり。ことなる事なし。

鳥、女、かきりなくかなしと思へと、さるさかなきゑひす心を見ては、いかゝはせんといへり。なにといふ事そ。

風、さかなきとは、つねには悪の字をかきてこそわろき事にいひならわせるを、これは無常とかけり。うつりやすくて、つねにさたまりたる心のなきをいふなり。ゑひす心とは、きはめて、見る物きく物心をうつして、いろ〳〵しき心也。ゑひすと申神は、いさなき・いさなみのみことの第三のひること申し神也。三さいまてあしなへこしゐてたつ事なかりしかは、ちゝのみこと、にくし、さうなしとて、あまのうきふねにのせて、うなはらにはなちすてたりしを、りう神見つけて、豈神のこ也人ならさらんやはとて、とりてやしなひけり。やう〳〵おとなしくなるまゝに人たちいてたりしを、ゑひす三郎とは申。いまの西宮也。この神は、ゆゝしと(く)いろ〳〵しき神にて、見る物きく物に心をうつしけれは、いろ〳〵しき